

森彦太郎先生自筆原稿

日高平野小字名雜考

日高平野小字名雜考

森 彦太郎

現行町村制による町村名は、いふまでもなく明治二十二年に撰されたもので、東・西内原のやうに古い郷名に因んだものもあり、矢田・志賀のやうに古い莊名を採つたものもあり、野口・塩屋のやうに舊村名を襲用したものもあるが、變つたところでは亂世の舊城主の姓を採つて村名とした湯川の如き、藤井・吉田の一字づつを採つて藤田とした如きもある。此の最後の例は他地方有田の田栖川や西牟婁の富士橋などにも往々見る所、つまり自治の圓滑を期するための窮餘の窮策ではあつたらうけれど拙悪愚劣の標本である。

町村制では大字なるものを認めてゐないが、事實上大抵の町村では自治の便宜上、舊村名を大字名として、その區劃を存置してゐる。この舊村名は徳川時代になつて本村から分れて命名されたといふ比較的新しいものもあるが、大抵は近古以前からあつたもので、中には郷名・莊名がその儘村名となつた（例岩内）のやうな古い由緒をもつものもある。

土地の小字名に至つては更にそれよりも古い。就中稅務署の土地臺帳に収録された小字名は永世不朽であるが、さうでないものは地主が變り、小作人が變り、賣られ買はれ行くうちに傳來の古名が、だんくに忘れられて行く。ぜひもない次第ではあるが、これは今に於ていはゆる郷土研究の根本用件として小學校あたりで大に究明に努めていただきたいものであるといふことを私は衷心から茲に提唱する。

そこで請ふ隗より始めよで私は先ず日高平野に於ける土地臺帳面の小字名・其の他に關する若干の愚考を披瀝したい。抑々公簿上の小字名なるものは大体は明治維新前から傳來のものを踏襲したのであるが、中には音だけを襲用して文字の一部を改めたものはないことはいふまでもない。たとへば満願寺の寺を忌避して満願地としたやうな類である。また在來假名書の地名にいい加減な當字をした例も多く、漢字名を見ただけでは何のことやらさっぱりわけのわからぬのがある。が總じて言へば小字名は大字名なんかより古い。建曆二年（皇紀一八七二）の熊野新宮文書に園・寶郷の四至を記して「北限蒼柱九寸大際」とある。蒼柱は現に湯川村大字財部の北境にあつて土地臺帳には藏柱となつてゐる。九寸はこれに隣接して大字小松原の西部に九原として傳つてゐる。小字名の

馬鹿に出来ぬことは右の例によつて知られよう。尚村々の字圖を継ぎ合せてみれば面白いことがある。

和田村（に大字はない）の小字打延に隣接して松原村田井にも打延がある。和田村の岩崎に隣接して湯川丸山にも岩崎がある。松原村田井の釜井戸に隣接して御坊町園にも釜井戸がある。こんな風の一つの小字名が二大字（昔の二村）に跨つてゐる例を拾つて見ると

丹生村上江川	字猿川
同村下江川	同村
矢田村中津川	字加納原
同村千津川	字加納原
矢田村千津川	字引谷
藤田村吉田	字引谷
藤田村吉田	字北河原
同村藤井	字北河原
藤田村吉田	字中黒
湯川村小松原	字中黒
湯川村小松原	字中黒
湯川村小松原	字土井
藤田村吉田	字東院

註 これは文字はちがふが音が似通つて居り、實地が接續してゐる。何れも當字らしい。

湯川村小松原	字瀬崎
同村財部	同村
湯川村丸山	字蓮池
同村富安	字蓮池
野口村熊野	字後谷
同村岩内	字後谷

如上の例は何を物語るか。卑見を以てすれば小字（名）が先づ出来て大字（即ち昔の村）が後から出来た。そして村界劃定のとくに小字を立割つて、こんなことになつたと見なければならぬ。無論小字は悉く人家の聚落であつたわけではなく、寧ろ大部分は田圃の區域に名づけたものである。

るが、發達成長の順序としては小字が先づ出來て、その集成したものが村（今の大字）となつたものと見なければならぬ。中には土豪邑長の居住するところの字名が直に村名となつた實例もないことはない。

それで里落發達の跡を尋ねんには、先づ各村各大字の小字圖を寫し集め、一大字分と他の大字分とを継ぎ合せ、更に一町村分と他町村分を継ぎ合わせ、或は比照し、或は綜合して考覈するところがあらねばならぬ。これは人文進歩の跡を討ぬる上に極めて意義あり價値ある仕事であるのみならず、これによつて自然地理——地形・地勢・地質の方面を知り、その變遷隆替を知る上にも非常に役立つ。而もこれが研究上、われらは今の小字圖に表示されてある文字に狗泥してはならぬ。今の圖上に現れ居る地名の文字には随分いい加減な當字があること既述の通であるから各大字の古老識者について一々その訓み方（古來の稱呼）を聴き質し、その發音の通、假名をつけ置きかねばならぬ。斯くして、われらの研究の對象は勿論その地名の漢字よりも假名の表現する發音である。たとへば藤井の棕瀨・野口の高森・岩内の王地・小中の清道地の如き、漢字を見ただけでは名義不可解であるが、音に随つて向瀨・神森・王子・清道寺といふ風に文字を置き換へてみると、それ／＼の土地の歴史がよくわかつて來る。園にも財部にも丸山にも大町といふ字名がある。無論日高川の沖積平野にあるところから昔の城下町の名残だらう（龜山城址の麓に近いから）などといふ見解も素人には首肯されるだらうけれど、「財部通れば空見てお出で、花の丸山御所どころ」なんていふ俚謡の錯覺に陥つてはならぬ。大町を市街の跡だといふならば、日高平野の中心を稍遠く離れた早蘇村玄子の春畝町・同村三百瀨の裏瀨町などは、どうだと問はざるを得ない。

當字にだまされぬやうにと最初に言つて置いた通・地名の町は古語問路まぢ 田圃の區劃に對する當字に過ぎない。「拾玉集」山里そとの外面おもの小田おいたの一畝町ひとせまちあらしめ延はへて種まきにけり（慈あま頭づか和尚）の歌にも見る通、町といふ當字は相當古くから用ひられたやうである。

御坊町大字御坊の如きは本願寺御坊を中心として、その門前町として發達したところだけに、歴史も新しく、發展の徑路も簡明で、御坊の舊位置「古寺内」を別とし、東筋・中筋・西筋の三字があつただけで、發展の徑路も簡明で、御坊の舊位置「古寺内」を別とし、東筋・中筋・西筋の三字湯川氏草創の吉原坊舎が天正の兵亂に焼失して後、佐竹伊賀守が現位置に再興するまでの過渡的存在として篤信なる門徒が協力して假にしつらへた園坊舎の所在地であつたわけで、今眞宗淨國

寺のあるところである。

こんな風に人文史を物語る小字名を拾ってみると、御坊町島の「壹里山」の如きは一里塚の所在地たることを明示する例で、一里塚は無論徳川時代になつて熊野街道筋に造營されたもの故斯種字名は割合に新しい。壹里山に接續する日高河邊の外河原・外新田などは更に新しいだらう。吉原の堂垣内は名だたる吉原坊舎の所在地たりしことを意味する。社寺に因縁ある字名は何處にも多く、どこの村へ行つても一割乃至三割はこれである。著例を擧げると

田井 宮垣内・堂ノ前
入山 王子山・王子後・王子前・王子西・觀音寺
小中 王子・王子前・王子裏・榊繩手・清道地
高家 里神
池田 宮ノ向・神田
志賀 山寺・庵ノ芝・里神・天満・天満前
小池 里神・寺谷
萩原 觀音寺・東光寺・王子脇・里神・神田・宮本・宮脇・宮ノ前
荊木 安明地・満願地・宮本
原谷 槌王子・若一・兩司本・王子谷・堂ノ前
富安 藥師谷・圓福寺段・堂垣内・神田・宮ノ前・會^桑下ノ谷・大明神・神後田
丸山 齋・齋谷・齋前・堂山・寺前
財部 寺ノ後・受持本・宮ノ前・宮ノ西・堂前
吉田 天神垣内
藤井 稻荷・宮田・寺ノ前・法華
鐘巻 大門・法華堂
土生 別當・宮ノ前
小熊 法徳寺・里神・法華經塔
野口 西光寺・庵ノ裏・高森
和佐 開山・門前
猪内川 宮脇・宮前・寺前・寺向

三ツ野川

佛串

三百瀬

光導寺・大門・庵ノ平・紀道芝

熊野

神子・神田・寺井

岩内

王地・地藏・宮ノ前

北塩屋

寺尾・鉾立・神子免・王子谷

南塩屋

坊ノ岡・須佐前・道場畑・坊主ヶ前・氏神前・鳥居縄手・須佐ノ本

名屋

船附・神田

園

宮ノ前・宮ノ後

吉原

寺田

和田

宮ノ谷・御崎社・宮脇・宮垣内・雷谷・

これを仔細に考究することによつて、社寺の位置・變遷・廢社寺の原位置・その他神事・佛事にゆかりあるいろくの事由を確め得る。たとへば御坊町大字園鎮座の郷社小竹八幡神社は延寶六年南龍院公別館址を下附されて今の位置に移つたもので原位置は元宮とて今では判明してゐるが、たとひ此の元宮なる四址が滅失しても、小字名宮ノ原。宮ノ後によつて推定し得るわけである。そして字名としての宮ノ前・宮ノ後が延寶以前からあつたことを知り得ると共に、今の小竹八幡社の位置は新しければこそ、その附近には宮に因んだ字名が一つもないのである。それから原谷の御所谷は後鳥羽院熊野御幸の時の畏き聖蹟。入山の城山は戰國時代の入山城跡。この城山などは徳川時代になつて名づけられたものと見える。萩原の石風呂は石室を意味し、その隣の龜山は甕山を意味し、共に考古學上の純乎たる古墳または塚穴（古墳の口の開いたものを塚穴といふ）の所在地たることを示すもの。富安の大塚に至つては一層明白に大規模の古墳所在地たることを示現してゐる。併し墾田拓地の進展により今は古墳も塚穴も全くなつてゐるが、考古學的討究によつて遺物の残片ぐらゐは拾集することが出来る。この場合古い小字名は非常な助けとなる。小中の衣奈谷、吉田及び丸山の衣奈原は文字通り胞衣を埋める吉方たることを意味するか否か、これは未だ考へ得ない。

小中の河津呂は西川の彎曲するところ、田井の齋津呂は齋新川の彎曲するところ、和田の鶴泊りも彎曲を意味するものと思はれるが、これは未だ考へ得ない。つるまたはつるはどこにあつても河岸・海岸などの彎曲する地形を意味する。田井の田端春三氏邸（油屋）は齋津呂にあるので、

その祖先は家號を齋鬻といひ、千種有功卿から「わが心みそぎやすらむいつきつるおもひやるさへすずしかりけり」といふ詠を寄せられたことがある。吉原の久保田、名屋の久保里、丸山の久保田、藤井の窪り、土生の久保などは低凹地に名づけられたもの。田井の西沼、和田の汐田、丸山の落合・袋などもやはり低濕地を意味する。園及び岩内にある荒毛は新墾を意味するか。吉田及び島にある籠田は水もちのわるい田地を意味するか。園のコケは不實を意味するか。これらは未だ實地を知らぬので考へ得ない。(別紙原稿挿入ノコト)

高見寺といふ寺名を記念する爲の「コケジ」といふ字名は他地方(比井崎村小浦)にあるが、園のは果して何を意味するか。

安珍清姫の物語で名高い日高川床の變遷も小字名によつて略々想察し得る。流水に關するわれらの常識よりするも、早蘇村から丹生村千曳の岩崖に突當り、それが北西に跳返すことは古今變りなきも、而も矢田村小熊以西の流路は古來數次の變遷があつた。沖積平野が纔に出來た當初は日高川下流の放流時代、それから時代が下ると小熊の中洲・法徳寺・下間瀬あたりから舟岡山・八幡山・龜山の南麓を洗うて入山の南から和田ぶけに入り本ノ脇の東數町のところで海に入つた。これは口碑にも傳へられ、實地(地形)を展望しても首肯される。さらに字名を拾うても、藤井の棕瀬、吉田の茅添・ちはら・河淵垣内、財部の薦淵・淵間・深洲・瀬崎、小松原の瀬崎、和田の河原瀬・鶴泊り・地開・アシ原・横ノ手・中開など歴々指呼することが出来る。次にこの流路で今の齋新川・西川の凹みを傳つて吉原辺で海に入つたことも想像し得る。齋新川は近世(寶曆頃)の開鑿であるが、これとても低凹地(旧河床)を利用したものに過ぎない。

建仁元年後鳥羽院の熊野御幸といふと今から七百餘年も前のことであるが、京極中納言定家のものした「御幸記」によると小松原御所・深淵に臨んで構ふ、水練の便宜ありなど、ある。これは今の小松原領ではなくて、ちよつと東に寄つた吉田領字中島(いづれは日高川の中島であつたこともあらう)のあたりで、字名としてではないが「御所ノ瀬」といふ地名が残つて居り、御所瀬橋とて今石橋の架つてある溝もある。丁度淨土宗萬樂寺の前に當る。この邊を中心として實地(低凹地)をたどり、それを字圖に比照すると、小熊の法徳寺邊から藤井の棕瀬・北河原、吉田の北河原・藤垣内・中島、小松原の早ヶ瀬・川原畑、財部の下河原・南河原・向河原、島の古川・向川原・東川田、園の新園・中島・洲崎あたりへ流れ、園の南方で海に入つたものと思はれる。そしてこの頃の日高川渡は小松原御所即ち今の吉田の字中島たりから對岸へ渡つたらしいから野口村野口

へ渡ったことになる。定家卿は小松原御所の附近で宿所を得ず、薄暮日高川を渡って岩内の民家に泊まったとある。

道成寺縁起の作者は流石に舊記を涉獵し、あの頃としては、すばらしい識見をもつてゐた。安珍清姫の事件は醍醐天皇の延長何年とやらの出来事だとしてゐるが、さすれば建仁元年の後鳥羽院御幸よりは更に三百年程溯らねばならぬ。この三百年程の間に日高川の流路にどのやうな變化があつたかは知らぬが、兎に角縁起を作る上に於ては、三百年後の御幸記を金科玉條とし、定家卿が河を渡って岩内王子に詣で、重輔庄云その縁故(？)で岩内の一民家に宿泊したとあるのにヒントを得て、「日高川という河にて折ふし大水出でて此の僧船にて渡りぬ。舟渡にいふ様、かかる者の只今追ひて来るべし、定めて此船に乗らんといはんずらん、穴賢々々、のせ給ふなといひけり。此僧はいそぎ逃げけり。あむのごとく來りて渡せと申しけれども、舟わたさず。其時衣を脱ぎ捨て大毒蛇と成りて此川をば渡りにけり。舟渡をばちけしと申して岩内にありけると日記に慥に見えなり。」と云つてゐる。日高川の渡と云へば、天田の渡(島・園または名屋から塩屋領天田にわたる)と思ひ込んで、「天田の渡どん夜も昼も赤い(無い)頭巾被くとう」の數とり歌を極めて古いものだとする近世以降の人々にとつては岩内の渡なんて考へ及ばぬところ、而も御幸記には河を渡って岩内王子社に詣でたとあるだけで、どこで渡つたとも書いてゐないのである。たゞ御所が日高川の深淵に臨んでゐたといふ點から垂究して、今の吉田の中島のあたりから對岸(とすると、どうしても野口)へ渡つた上、河に沿つて下り岩内王子社へ参つたと見るのが最も穩當だと思ふのである。

最後に私の解し得ない小字名を少しく列擧し他地方に於ける同名また類似名の有無を承りたく併せて識者の高教を仰ぎたいと思ふ。萩原に牛内といふ字があり、島に牛河といふ字がある。この牛(うし)は何を意味するものだろうか。高皿といふ字名は原谷・大瀧川・和佐等の溪流に近いところにもあり、丸山・財部等の平野地方にもある。これは地形を示現するものらしいが、私は未だ實地を踏査しないので、測案を下し得ない。原谷の鹿ノ骨(しかのほね)・披喜(びき)、萩原の御子録(みころく)・鉾野(ほこの)・頓行(とうぎよ)、小中及び志賀の高惣(たかそ)・小池の老僧(おいそ)、荊木の周家、島の飴家・經野・天目山、吉田の朱家(荊木の周家と同じか)・くぐつや(傀儡の居住地でもあつたらうか)、財部の左ツ鍋、小松原の早雲なども考へ得ない。

以上は土地臺帳面の小字名についての話であるが、初めに言つた通、臺帳以外に傳つてゐる地の俗名が少くない。これらの討究は或場合公簿上の字名調査よりも、より以上に價値あり興味あることもある。いはゆる郷土研究の眼が、方面に向けられ、ここを出發點としなければウソだといふことを繰返して言つて置く。

(完)

この原稿は表題の通り、森先生の自筆鉛筆書きで、和歌山県日高郡東内原村荊木森 彦太郎と印刷された^嵩陽書院専用原稿用紙二〇字×二〇行二〇枚に記されていた。

どうして先生の自筆原稿が父の蔵書の中にあるのか、またこの原稿の脱稿された年月日が判らないが、父清水長一郎が著した『森彦太郎先生傳』（昭和二十七年十一月三日発行）によると昭和八年先生四十六歳の執筆であることが判った。

この著書の他地名に関する郷土資料として、松原村田端憲之助氏の『地名難訓』・和田村和田喜久男氏の『和田村小字考』が残っている。

平成十六（二〇〇四）年二月十九日

清水 章博

嵩